

学術・文化で活躍した人

三橋鷹女 (みつはし たかじよ)

明治32年〜昭和47年 (1899〜1972)

俳人

女流俳壇の四丁と称される



成田市田町に生まれる。本名たか(通称たか子)。大正5年、成田高等女学校(現成田高校)を卒業後上京し、兄・慶次郎のもとに寄寓。兄の師事する与謝野晶子、若山牧水に私淑し、作歌に励む。大正11年、歯科医師・東謙三と結婚。夫の影響で俳句に転向し、原右衛門が主宰する「鹿火屋」に入会し、夫と共に競詠する。昭和9年、小野蕪子主宰の「鶏頭陣」に転じ、東鷹女と号す。同17年、長兄が病死したため、三橋家を継ぐ。同28年、「薔薇」の同人として参加。句集に『向日葵』『魚の鱗』『白骨』『羊歯地獄』『樵』。鷹女は戦後、女流俳人の中で、橋本多佳子、中村汀女、星野立子と共に、「女流俳壇の4丁」と称された。



鷹女の自筆俳句

学術・文化で活躍した人

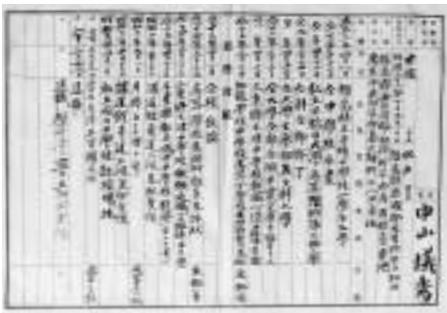
中山義秀 (なかやま ぎしゆう)

明治33年〜昭和44年 (1900〜1969)

芥川賞作家 成田中学で教鞭を執るかたわら創作に励む



福島県大信村に生まれる。本名は義秀。早稲田大学在学中、横光利一らと同人雑誌「塔」を創刊し、小説『穴』を発表。卒業後、三重県立津中学校(現津高等学校)の英語教師になる。大正15年4月、成田中学校(現成田高校)の英語教師として赴任し、昭和8年3月まで教鞭を執るかたわら創作に励んだ。その後、上京し、苦難に満ちた文筆生活に入る。自伝小説『台上の月』は、成田在住時代の体験をもとにした作品。同13年、『厚物』で第7回芥川賞を受賞。同39年、『咲庵』で野間文芸賞を受賞。同41年、芸術院賞を受賞。『テニヤンの末日』『華燭』『芭蕉庵抄書』など数々の名作を残した。



成田中学に提出した履歴書

学術・文化で活躍した人

牧野佐二郎 (まきの さじろウ)

明治39年〜平成元年 (1906〜1989)

生物学者 染色体の研究に一生をかける



成田市幸町に生まれる。双子であった佐二郎は、「双生児はどうして生まれるのか」という素朴な疑問から生物学への興味をわき、北海道大学へ進学。動物学や染色体の研究を始める。昭和10年、北海道大学助教に授けられ、22年には教授となり、ガン細胞の研究に取り組んだ。その後、米国の著名な学者との交流などを通じて、トの染色体の研究を始めるようになり、海外での研究発表を数多く行った。同44年、北海道大学に動物染色体研究施設が設立され、初代施設長となる。翌年、同大学名誉教授になる。



佐二郎が掲載された英字新聞

「成田ゆかりの人物」協力者(敬称略) 飯田栄、伊藤仁三郎、岩館博、小川不二夫、神崎清野、川辺春光、新谷秀雄、竹尾節、牧野千代、水野清、三橋絢子、宮本好子、諸岡市郎左衛門、諸岡謙一、山口きよ大原幽学記念館、大昭和製紙、宗吾霊堂、長沼区、成田高等学校、成田山新勝寺、成田山仏教図書館、成田山霊光館、日本経済新聞社